INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.59

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1989年12月26日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-821-3737㈹
FAX.03-821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

MRAワールドレポート　(東ヨーロッパ)

東欧諸国における改革の背景

イエンツ・ウイルヘルムセン
(ノルウェー・労働評論家)

●ポーランド、ハンガリー、東ドイツ、チェコスロバキア、ソ連の中で何が起きているのか、そして今、西側に求められていることは何か

この度日本で行われたMRA国際チーム連絡調整会議にノルウェーから参加したイエンツ・ウイルヘルムセン氏が近畿日本鉄道株式会社で去る十月二十日に行った最近の東欧情勢に関する講演をご紹介したい。

●イエンツ・ウイルヘルムセン
一九二六年生まれ。第二次世界大戦中、ナチ占領下のノルウェーで地下レジスタンスに参加。現在、スイス・コー財団理事、コー産業人会議及び日米欧財界人円卓会議コーディネーターなどを務める。著書に「人と機構」がある。労働評論家。

一、恐れに打ち克った東欧の人々

私には東欧情勢を語るたいした資格がある訳ではありませんが、四十年にわたり共産主義者と実際に交流してきた体験に基づいたお話をしたいと思います。

ここ十年間の東欧における変革の先頭に立ってきた人々、例えば皆さんもご存じのソルジェニーツィン氏やサハロフ博士といった方々と直接接して感じることは、無関心、あるいは考えを持たない人よりも、たとえそれが間違った考えであったにせよ、確信を持って動いてきた人間は突如として変わりうるということです。

二十世紀に入ってから起きた二度の世界大戦で、ヨーロッパは数百万の人命を失い、第二次大戦直後にその中央部で分断されてしまいました。この分裂を、戦争を引き起こすことなく克服できるかということが、現在の重要な問題であり、その影響は日本のような遠く離れた国々も含む全世界に及びます。

西欧で五年前に、いわゆる平和裏な変革というものが共産主義諸国でなされるかという質問をしたならば、恐らくほとんどの人が「ノー」と答

■MRAワールドレポート「東欧諸国における改革の背景」　1P
労働評論家 イエンツ・ウイルヘルムセン
■第12回関西秋季大会レポート　6P
■南アから人種融和に貢献するブレマー・ホフマイヤー夫妻来日　7P
■本年度の主な活動報告と来年度の主な活動予定　8P
■MRA関西月例会シリーズ「私の歩んできた平和への道」　9P
一燈園同人　石川　洋
■アフリカ・ザンビアで過ごした2年間(その8)　14P

えたことでしょう。一九五六年のハンガリー動乱、一九六八年のプラハの春などソ連軍の戦車によって踏みつぶされた事件が思い出され、日本でも一九四五年に北方領土が奪取されたことが国民の念頭にあると思います。

しかしながら、四年前にゴルバチョフ書記長が政権についてから、我々が夢にも思わなかったような変革が起こっています。例えば、ソ連においてはいわゆる直接選挙によって選出された議会が、現在では共産党に対峙する勢いとなっており、またポーランドはソ連に次いで東欧で二番目に人口の多い国ですが、その内閣は現在、共産党員ではない首相による一種の連合政権を作っています。ただ、非共産党内閣ではありますが、内務大臣や防衛大臣は共産党員です。しかも、八年前は現首相と内務大臣が、投獄されていたのです。

ポーランドでは一般大衆の力が改革を進めていますが、その一つが「連帯」です。「連帯」は一九八〇年に最初のストライキをうって以来、非常に広範な労働者の大衆運動として発展し、数多くの信者を擁するカトリック教会と力を合わせると共産党以上の勢力になるというのがポーランドの構造です。しかも、ポーランドの共産党が背負っているハンディキャップはこれまでの政府がソ連との同盟関係を持ってきたことです。歴史的に、ソ連はポーランド人にとって憎しみの対象となっている国なのです。

それに対して、ハンガリーでは上からの改革が進んでいます。ハンガリー政府は最近、共産党から社会党へと政党名を変え、しかもこの社会党は西欧でいう意味の社会党に近い政党であるとまで言っていますが、それにも拘らず来年二月に予定されている自由選挙では敗北が予想されています。

こうした動きの背景にある要因は、人々が今まで存在していた恐れに打ち克ったことです。つまり、考えを自由に表現できるようになったのです。最近ハンガリーの首都ブダペストで著名な科学者が夕食会の席上、「マルクスの死に乾杯！」と乾杯の音頭を取ったところ、同席者全員がそれに加わったという話もあります。

こうした出来事は東欧諸国の四億の人々に自由獲得の希望を与えています。ソ連では七十年間にわたり共産主義の思想が一般の人々に吹き込まれたにも拘らず、前回の選挙では国民の持つ自由に対する要求や希望というものを抑圧することができなかったのです。

二、西側も東側も過去に対して正直になる必要がある

一方で今年の六月に北京の天安門で起きた出来事は、時計の針は、たとえ短かい時間であっても後戻りすることがあるという一つの教訓を与えてくれます。これに関連して、ハンガリー政府には自分たちの改革を遂行するためにはできるだけ早いうちに選挙をやってしまおうという動きがあります。これはゴルバチョフ書記長が失脚するかもしれないという恐れがあるからです。

しかし、私の知っている東欧の人々は将来についてかなり楽観的です。今年の春、オスロの私の家にユーゴスラビアの長老政治家をお泊めする機会がありました。ミロバン・ジラスというチトー政権下で副首相を務めた方です。一九五七年に、「新しい階級」という著書を発表し、その中で「東欧圏に新しい階級が生まれている」と初めて主張したために、五年間投獄されました。ジラス氏は「新しい動きが後戻りすることはあっても、元の状態に戻ることは決してありえない」と言っていました。これは国民の認識が全く変わっているからで、同じことは中国にもあてはまると思います。

後戻りをしないようにするには、過去の出来事を直視することが重要です。ソルジェニーツィン氏はその著書「収容所群島」で、かつての収容所での出来事を書いていますが、そうした事実があったことをはっきりと認識する必要があると思います。ゴルバチョフ書記長自身も、一九三〇年代の血の粛正、あるいは三〇〇万人ものポーランド人の追放があったことを明らかにして、ソ連の歴史に空白を残してはいけないと言っています。過去に対して正直になるという点について西側にも教訓として学ぶべきことがあります。例えば、東欧の人々は一九四五年のヤルタ協定を快く思っていないということで

●近鉄での講演の様子

す。つまり、チャーチルとルーズベルトが東欧がソ連に支配されることを許したというのが東欧の人々の感覚です。スターリンの真意を理解せずに、戦争終結を目的にした安易な態度からヤルタ協定が成立し、この協定自体は西側にとっては都合が良くても、結果的には東欧諸国を共産世界に売り渡してしまったと見ているわけです。

三、外からの支援が欠かせない東欧の改革

我々西側にとっても現在の東欧の動きに対して、すべきことがあります。現在、ポーランドとハンガリーの変革運動を成功させるべきであるという認識が浸透しています。政治的自由化と経済改革がこの二国で成功すれば、ソ連国内の改革運動を助け、大きな道が開けるという考えです。そうした意味で、日本政府がポーランド政府に緊急食糧援助を決めたことは歓迎すべきニュースです。ポーランドの人口の二十パーセントが飢えに直面し、インフレ率が非常に高く、ノルウェーと比較するとポーランド国民の生活水準は実に百六十分の一という差があります。

また、企業の九十パーセントが国営ですが、経営がうまくいっていません。今●の夏に会った「連帯」の指導者に言わせると、問題は経営そのものが存在しないということだとのことです。したがって、ポーランドでは、政治というものに対する国民の基本的認識、また産業や経済の初歩的な教育や訓練が必要です。例えば民主主義についてもよく分かっていないわけです。最近、「連帯」のメンバーで国会議員に選出された人が言うには、政治や議会の基本的な概念について自分たちは何も知らないということです。我々ノルウェーのMRAではこうした若手のポーランド人のためのセミナーを近々開催する計画を立てています。

最近、西側先進国全体として一九九〇年に十億ドルの援助をすることが決まったそうですが、こうしたことを通して産業の育成を図ることが必要です。ジョイント・ベンチャー、あるいは銀行の創設が第一歩です。現在、ポーランドでは銀行制度がほとんど存在しないのです。「連帯」のワレサ委員長は「こうした変革や外部からの支援がなければ、現在の連帯政府に対してすら国民の反対による新たな革命が起こりかねない」と言っています。現在起きている改革に対する外部からの支援が欠かせない状況です。

四、新しいポーラン●政府誕生の背景にあった一人の「連帯」指導者の決心

しかし、こうした改革にはもう一つの側面があります。私が日本に参ります数日前のことですが、「連帯」を作った指導者の一人が訪ねて参りました。一九八〇年のストライキ後、五年間投獄された経験を持つ人ですが、彼が心配していることは、西側の物質主義に浸食されている国民がかなりいるということです。つまり、共産党が色々な方法で抑圧しようとしても屈することのなかったポーランド人の精神や信仰が自動車や嗜好品やおカネといった豊かさの前に脆(もろ)くなっているというのです。

西側は、物ばかりに頼らない援助をすることが必要ではないかと思います。そのためには、我々が住んでいる国や社会で道徳的精神的な価値を見直す必要があると思います。具体的には、毎日静かな時間を持って、自分の生活や社会を見直す必要があると思います。ポーランドの人々が心配していることに対して、私なりの答えを出すとするならば、まず、自分の身の周りから直してみるということだと思います。物とお金というものが人間と比べて本当に大切なのだろうか、あるいは自分の経歴や成功と、正直な生き方ということのどちらが大切かといったことを一人ひとりが考え直してみる必要があると思います。一人ひとりがごく身近なところから決心をすることが、非常に大きな連鎖反応を生み出し、時として大きな動きにつながることがあります。先ほどお話しした「連帯」の指導者が、私と一緒に静かな時間を持った時に浮かんだ考えは、色々な意見の行き違いがあったもう一人の指導者に謝罪するということでした。すぐに彼は手紙を出したわけですが、そのことがきっかけで「連帯」とポーランド共産党による円卓会議を開くことにつながっていったわけです。こうして、円卓会議が開かれたことから新しいポーランド政府の誕生を可能にしたわけです。

しかしながら、一番重要なことはソ連自体に何が起こるかということです。ゴルバチョフ書記長が改革を一体どこまで進めたいかにカギがあるわけですが、最近はソ連でも、色々と良い兆候がでてきています。ポーランドに「連帯」政権が誕生した時、またハンガリーの共産党が社会党と改名した時に、ゴルバチョフ書記長は祝電を打って祝意を表明しております。先月、モスクワで開催さ

れた国際書籍フェアに対して、彼は「書籍は人間の善と悪、真理と虚偽との間の判断を決める道徳的選択を可能にする。従って書籍は世界全体に改革をもたらす重要な勢力である」というメッセージを送っています。ゴルバチョフ書記長がここでいうように階級闘争を善と悪との戦いに置き換えることが起こりうるなら、このことは一般の人々の心の中に常に存在するわけですから、共産主義のイデオロギーにとって新しい一歩が記されることになると思います。新聞によれば、ポーランドのヤルゼルスキ国家評議会議長は階級闘争はもはや解決の方法ではないと言明しています。

五、改革に抵抗する特権階級とグラスノスチによる民族主義の高まり

また、ソ連では二つの大きな問題があります。一つは経済自体が不景気に陥り、市場の活力をいかした経済活動に向けての開放が進んでいないことですが、果たしてゴルバチョフ書記長自身にそこまで進める気がないのか、それとも進めるだけの力がないのかということは誰にも分かりません。ただ、これらの動きに、特権を持つ官僚が抵抗していることははっきりとしています。自由経済や市場経済が導入されると、彼ら自身の特権が脅威にさらされることをよく知っているからです。一方国民も生活水準が低下してしまうことを感じるようであれば、自分たちの特権を失いたくないといった動きが起きるわけです。今年の夏に炭鉱でストライキがありましたが、この事実は指導者にとって大変な脅威、警告となりました。

もう一つの大きな問題は、民族主義と独立運動の高まりです。いわゆるグラスノスチによってこうした動きが可能になってきたのですが、これはソビエト連邦を構成している十五の共和国で高まってきています。これらの中で一番大きい五千万の人口を抱えるウクライナ共和国は、常にモスクワからの独立を求めてきました。また、南部には五千万人の回教徒が住んでおり、これらの人々はモスクワに対する忠誠心よりも回教への信仰が優先するわけです。西側にはスカンジナビア諸国に近いリトアニア、エストニア、ラトビアのバルト三国があります。これら三国は一九三九年のヒトラーとスターリンの協定によってソ連に併合されましたが、経済的に独立した政府の樹立を望むと同時に、ソ連からの分離独立の賛否を国民投票することになっています。ソ連が分裂する可能性、危険性に対し、ゴルバチョフ書記長をはじめとする指導者たちがどのように対応するかが注目されています。

六、憎しみや偏見を捨てて、ソ連と東欧諸国の改革を支援していこう

こうした葛藤の中で次に何が起こるかを予測することは非常に難しいのですが、東欧の人々の心の中には様々な思いが交錯しています。過去に殺戮、追放、迫害をもたらした共産主義への復讐心があると思います。最近、ポーランドのある指導者は「復讐の波を食い止めてこれたのはカトリック教会の力が大きい」と言いましたが、ソ連には人々の復讐心を抑えられる力がありません。従って、ソ連の指導者達にとっては国民からの復讐が大きな恐れになっていると同時に、ソ連を取り巻く国々の動向にも目が離せない状態になってきています。例えばECは一九九二年に統合することになり、アジア諸国の経済活動も非常に活発化してきています。また、現在様々な動きのある隣国の東ドイツは、ロシア人が伝統的に恐れを持っている国です。まして、両ドイツの統合が起こりうるならばソ連自体がどうなるかというような複雑な思いが指導者の胸中にあると思います。

私達は、恐れという感情が物事を否定的な方向に導くということを知っています。従って、我々はソ連の動きを注視すると同時にソ連を取り巻く国々に早計にことをけしかけるのではなく、ソ連の指導者のために賢明な政策を推進することが大切です。憎しみや偏見を持って対応するのは、国家レベル、個人レベルにおいても決して芳しい方法ではありません。様々な手段で、ソ連あるいは国民とのつながりをどんどん広げて行くことが必要ではないかと思います。そのためにも、経済的にソ連を援助することによって国民の生活を向上させ、様々な改革が速やかに起こるような動きを続けることが必要です。

我々ヨーロッパと日本の間にこの巨大な共産主義ブロックが存在するわけですが、この共産国家群がより自由でかつ平和な社会を築くために私どもが両側から支援してゆきたいと思います。またこのような共通の目的に向かって進むことによって、西側と日本との関係がより緊密になるものと思います。

（終）

●次ページに関連記事掲載

特別寄稿

「ベルリンの壁」崩壊とヨーロッパの今後の課題

イエンツ・ウイルヘルムセン

●この記事はウイルヘルムセン氏の帰国後起きた「ベルリンの壁」撤去という歴史的出来事を受けて、急遽に執筆して頂いたものです。

これまでベルリンを西と東に隔てきた壁が取り壊されたことを喜ぶベルリンの人々の姿を見て、心を打たれなかった人はいないでしょう。東ドイツの国民は、過去二十八年間にわたってあの壁の向こう側に閉じ込められてきたのです。この革命は自由を求める何百万という一般の人々によって下から始められたものですが、同時にベルリンの壁の撤去はこの国の指導者達によって上から遂行された革命でもあります。三十八万人のソ連兵がこの国の国境に配備されているわけですから、モスクワからの承認が大きな役割を果たしたに違いありません。

一方、ドイツ国外の反応は喜びと不安が入り混ざった複雑なものでした。遠い夢のように思われていたドイツの再統合が突如として現実的な可能性と化したからです。東西両ヨーロッパは〝強いドイツ〟というものに対する恐れを未だに抱いています。

ヨーロッパを分断していた壁が崩壊した今、信頼が築かれなければなりません。その一つの鍵はまず全てのヨーロッパの人々が正直に過去を直視することです。一九三九年にヨーロッパ大陸、そして世界を襲った悲劇に対して、私達の中で責任を逃れられる人はありません。言い訳しあうのではなく過ちを認めることによって、私達は過去から開放され隣国の信頼を勝ちとることが出来るのです。

EC内で両ドイツ、あるいは西ドイツがより強固に統合されていくことにより〝強いドイツ〟に対する恐れもやがて静まっていくことでしょう。これは必然的に弧立主義的・国家主義的な冒険の可能性を減少させることになります。また、東ドイツのかなりの領土をポーランド領と定めている現在の国境線を西ドイツが尊重し続けることをコール首相が確認したことも、恐れを小さくするのに役立ちました。

ゴルバチョフ書記長は「ヨーロッパ共通の家」という構想を唱えていますが、まずその家が作られるための基盤というものが明確に定義されなければなりません。共産主義システムの破綻が明らかになった一方、物質的な豊かさと政治的自由を享受している西側には道義的、精神的貧困がはびこっています。東ドイツの主要な反体制政治グループ「新フォーラム」の指導者は最近こう語っています。「西ドイツはひどい所だ。商店は人で溢れているし、過剰消費も目に余る。東ドイツには友人と語り合う時間がある。仕事中毒になるほど稼ぐことはない」。

ジブラルタル海峡からウラル山脈に至る共通の文化圏にまたがり、歴史と共通の宗教によって形成されるという恵まれた立場にあったヨーロッパの地盤が、東側に植え付けられた共産主義の思想と西側の利己的で放任的な生き方のために揺らいでしまったのです。

ベルリンの壁の崩壊は確かに歴史的な出来事ですが、その壁の両側の人々が道義的、精神的な改革（moral and spiritual rearmament）を受け入れるかどうかに、人類に対してヨーロッパが今後どのように貢献していけるかがかかっています。（終）

「MRAの歴史」のビデオ（ベータ・VHS）

発売中

頒価2,000円（送料込）

詳しくは事務局までお問い合せ下さい。

03(821)3737

第十二回MRA関西秋季大会開催される

―一泊二日の日程で国内外より九十名参加―

神戸・住吉研修所

爽やかな秋晴れに恵まれた神戸の住吉研修所で、十月二十一日から二十二日にかけて第十二回MRA関西秋季大会が開催されました。

今回は「変革の源泉」というメインテーマの下、ノルウェーのイエンツ・ウイルヘルムセン氏とグナー・ヨンソン氏、フィジーのスレッシュ・カトリ氏、マレイシアから大阪外語大へ留学中のプシュパ・パナダムさんなど海外からのゲストも交えた約九十名が、地元関西はもとより関東そして九州からも参加し、国際色豊かな雰囲気の中で和やかな会合がもたれました。

一日目は全体会議、三つの分科会（①先進国の条件②家庭の役割③自己の再発見）に分かれての討議、夕食を共にしながらの懇談に引き続いて有志によるフォークソングのミニコンサートが行われ、「新しい世界」などのMRAソングを一緒に歌いました。その後も開放して頂いた喫茶コーナーで夜遅くまで熱心に語り合う姿が見られました。

二日目は前日に引き続いての分科会で議論がさらに深められた後、まとめの全体会議でチームワークの貴重さ、新しい世界作りを目指して共に歩んでいくことの大切さが再確認され、大会の全プログラムを無事終了しました。十二回目ともなれば顔馴染みの方々も増え、お茶や食事の時間の話し合いも一段とはずみ、恒例のバザーも好評で売れ行きも上々でした。

●MRAソング「新しい世界」を一緒に

●スレッシュ・カトリ

フィジーで、インド系住民とフィジー原住民との関係改善に努めている。原住民の指導者に会い、インド系住民の方がフィジー原住民より優れているという優越感を個人的に持っていたことを詫びた。そうすると、それまで自分の家は古くからのヒンズー教徒で原住民との付き合いは全くなかったのに、彼らが自分の家に来て食事をしたり泊まったりするような関係が出来た。こうしてお互いに理解を深めるということが最もフィジーに求められているが、自分のようなごく平凡な人間でも決意をすればその役割を果たすことが出来る。

●古川宣宏

台湾のビジネスパートナーの女性が、仕事の打ち合せの時によく目を閉じて一分位静まりノートに何か書き出しては、とても良い提案をしていた。それはどういう方法かと尋ねると、MRAというところでそのやり方を学んだという。その後MRAの世界会議場であるスイスのマウンテンハウスに行き、静かな時間の持ち方を教えてもらった。早速モンブランの麓のホテルで試してみたら、自分の大切さや存在意義が心に強く感じられ問題解決のきっかけとなった。これからも心の声を聴く訓練を積んで心のレベルを上げていきたい。

●新納摩子

これまで母との関係が上手くいっていなかったが、この会合に参加して、自分には、親なのだから娘の考えていることくらい分かってくれてもいいのにという甘えが、そして母には娘なのだからという甘えがお互いにあったということに気が付いた。自分の意見だけ先に主張するのではなく、先ず母の言い分をじっくりと聞いて心の内を知ることが大切で、そうして忍耐力を養っていくことが人間としての強さにつながっていくと思う。それは親子関係に限らず、友人、同僚、そして国際社会でも大切なことだと思う。

南アフリカ共和国より人種融和に献身する

ブレマー・ホフマイヤー夫妻来日

［10月31日～11月9日］

東京と関西の月例会に出席、緊迫の南ア情勢等を報告

去る十月三十一日から十一月九日まで、六年ぶりに来日した南アフリカ共和国のブレマー・ホフマイヤー夫妻を、東京及び関西の月例会にゲストとしてお招きした。

ホフマイヤー氏は一九〇九年南アフリカに生まれ、南アフリカ大学卒業後、ローズ奨学金を受け、オックスフォード、ケンブリッジ両大学にて学位を取得した。一九三四年以来MRAの創始者フランク・ブックマン博士指導のもと世界的規模のMRA活動に参加し、世界六大陸、四十ヵ国以上を訪問してきた。これまで特に、自宅を白人、黒人、有色人種の出会いの場として開放し、南アフリカの人種間に融和をもたらすために貢献してきた。

また、奥さんのアグネスさんはケニヤに生まれ、英国で学生時代にMRAと出会い、戦後スイス・コーのMRAセンター、マウンテンハウスの創設に携わった。

一九五六年、マウマウ団と呼ばれるケニヤ人農民によるイギリス人に対する反乱の際、最も尊敬される白人をいけにえに捧げれば神の怒りが収まると信じるマウマウ団によってアグネスさんの父親が捕らえられ、生き埋めにして殺された。後に、その悲劇を克服してマウマウ団を許したアグネスさんは、ホフマイヤー氏と手を携えて人種間の融合のために献身している。

来日した翌日の十一月一日に千駄ヶ谷の全郵政会館で行われた十一月東京月例会では、まず、夫妻のブックマン博士との出会いや、MRAの真髄とは何かということから話が始まり、アグネスさんが父を殺したマウマウ団に対する憎しみや怒りを如何にして克服し、彼らを許したのかという話の後、現在、世界が注視しているナミビア独立問題も含めた南アフリカ情勢について貴重な報告がなされた。

夫妻は十一月七日付の毎日新聞夕刊で次のように紹介された。

◇

『南アで道徳再武装運動』

「自分に正直」「利己主義を捨て去る」など四つの道徳規範を掲げる「MRA（道徳再武装）」運動をアパルトヘイト（人種隔離）政策の国、南アフリカで展開するブレマー・ホフマイヤーさん（八〇）、アグネスさん（七三）夫妻がこのほど来日、同運動関係者や政財界人との交流を深めた。

ホフマイヤーさんはボーア人（オランダ系南ア人）、アグネスさんは英国系だが、一九五〇年以来ヨハネスブルクの自宅を白人、黒人、混血など全人種に「出会いの場」として開放し、人種融和の道を探ってきた。

南アの黒人活動家らはアパルトヘイト撤廃のために国際社会による経済制裁を提唱しているが、夫妻は「〝経済制裁を甘んじて受ける〟といっている黒人の多くは職を失う危険がない層だ」と反対する。

その二人も「変革の過程にいるのは間違いありません」と、近い将来多数派の黒人政権が生まれることを確信している。

◇

その後、夫妻は大阪の住友クラブで十一月七日に行われた関西MRA十一月月例会にゲストスピーカーとして招かれ、九日に次の訪問地である台湾に向けて出発した。

●東京月例会でジャパンタイムズ記者のインタビューを受けるホフマイヤー氏

MRA一九八九年の主な活動

	国内	海外
一月	●第四回コー円卓会議ミーティング（ゲスト ブリジストンサイクル相談役石井公一郎氏）	●コー冬季大会（スイス） ●MRA国際会議「第八回 開発のための対話」（インド） ●ラテン・アメリカ会議（南米各国）
二月	●文化講演会（九州MRA協力会共催）（講師 キヤノン社長賀来龍三郎氏） ●第十回通常総会 ●MRA文化講演会（東京）シンポジュウム「日本語就学生の現状と問題点」 ●MRA文化講演会（大阪）（講師 一燈園同人石川洋氏） ●日米欧財界人円卓会議インドキャンペーンに代表派遣	●第十五回青年育成スタディーコース（オーストラリア） ●MRA北米国際会議（カナダ）
三月	●日米欧財界人円卓会議インドキャンペーン報告会	
四月	●東京バザー開催	●MRA国際会議（ジャマイカ） ●MRA国際チーム連絡調整会議（フランス）
五月	●第五回コー円卓会議ミーティング（ゲスト 外務省外務審議官國廣道彦氏） ●第十三回MRA日本キャンペーン（小田原・大阪・神戸・東京） ●ダイアログ・イン神戸（神戸輸入促進フォーラム共催）	
七月～九月	●第六回コー円卓会議ミーティング（ゲスト P＆G元会長オーエン・バトラー夫妻） ●コー世界大会報告会	●第四十三回コー世界大会「変革の源泉」（スイス） ●第二回エコロジー円卓会議（スイス） ●第四回日米欧財界人円卓会議（スイス）
十月	●MRA国際チーム連絡調整会議（富士吉田） ●第七回コー円卓会議ミーティング（ゲスト 連絡調整会議参加者） ●九州MRA協力会第十九次訪韓 ●MRA体験集「出逢い……」MRAと私No.2出版	
十一月	●月例会（ゲスト ホフマイヤー夫妻）	●MRA国際フォーラム（エルサルバドル）
十二月	●第八回コー円卓会議ミーティング ●バザー開催 ●第十一回通常総会 ●MRA文化講演会（講師 チベット文化研究所所長ペマ・ギャルポ氏）	●MRA国際会議「90年代の新しい展望」（オーストラリア） ●MRAシンポジウム・カンボジア難民キャンプ訪問（タイ） ●コー冬季大会 ●MRA国際会議「第九回 開発のための対話」（インド）

MRAワールド
ニュースマガジン
FOR A CHANGE
（フォー・ア・チェンジ）
購読受付中

MRAワールドニュースマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間11回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名を明記の上、ご希望の定期購読料（3ヵ月分＝￥1,000 1年分＝￥4,000※共に送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下さい。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

スペシャル・クリスマスオファー
平成二年一月末迄お申し込みの場合、年間購読料￥4,000円が
￥3,000円になります。（但し最初の一年間のみ）
お申し込みはお早めに！

《1990年の主な活動予定》

2月
- ◆青年育成スタディーコース（オーストラリア）
- ◆MRA文化講演会

4月
- ◆日米欧財界人円卓会議東アジアキャンペーン東京プログラム

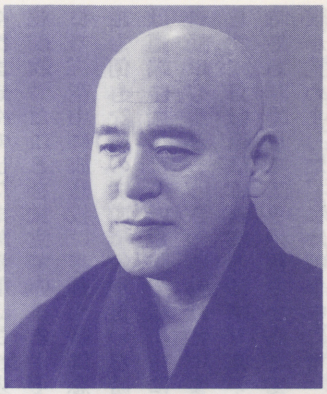
7月～8月
- ◆MRA青年キャンプ（台湾）
- ◆日米欧財界人円卓会議（スイス・コー）
- ◆MRA世界大会（スイス・コー）

10月
- ◆MRA国際会議日本キャンペーン（小田原・関西・東京等）「心の国際交流パートⅣ」
- ◆MRA関西秋季大会（神戸）
- ◆九州MRA協力会第20次韓国視察団派遣

MRA関西月例会シリーズ

私の歩んできた平和への道

一燈園同人
石川　洋



（いしかわ・よう）昭和5年栃木県鹿沼市に生まれる。17才の時、一燈園創始者・西田天香氏に出会い、師事。現在、一燈園同人、国際宗教同志会常任委員、世界宗教者平和会議日本委員会人権部会委員長、東南アジア難民救済、スラム支援、在韓韓国人被爆者、忘れられた日本人妻の支援にあたる。「ありがとう愛の会」提唱者、「仏桑花の会」事務局長、順教尼遺弟会「この花の会」相談会。

著書「捨てなければ得られない」、「一人には一人の光がある」、「生きる力を求める人に」、「人生逃げ場なし」、「逃げたらあかん」、「冷たい手もあたたかい」

●注：この記事はMRA関西月例会で本年行われ好評を得た石川氏の講演を要約したものです。

◇◆◇

ただ今ご紹介頂きました、京都の山科にございます一燈園の石川でございます。今日は「私の歩んできた平和への道」という題で、少々お時間を頂けたらと思います。

私は昭和五年二月十五日の生まれで、次の誕生日が参りますと五十九歳になります。

どうして私の生年月日を申し上げたのかといいますと、先ず私がまだ若造であるということと、少年時代、そして多感な青年時代を戦争中に過ごしたということをお分り頂くためでございます。この時代的背景というものが、私の人生にとって欠かすことの出来ないものであり、私を作ってくれた一つの大きな精神的土壌であると思っております。

一、道はすでに拓かれていた

私の父はアメリカとメキシコで独学で医者になった人で、メキシコ大統領の主治医として大佐に相当する地位にありました。ある時革命が起こり、革命軍に追われて砂漠の中を大統領と一緒に逃げたといいます。父は追っ手の兵士を拳銃で射殺し、二発目の引き金を引こうとした時、人を殺したという罪悪感に襲われ、拳銃を捨てて投降しました。そして死刑台に上げられるのです。異国の若者ということで同情されたのでしょうか、「何か言い残すことはないか」と聞かれ、父は「国の老いた母に最後の写真を撮って送ってほしい」と頼みました。写真係がスパイだったのかどうかは分かりませんが、写真を撮った後、父を逃がしてくれたのです。その時の父の写真は私のアルバムの中にありますが、大変に緊張した顔をしております。

さて、父は今度は満州で医者として活躍したいという志を抱いて日本に帰りますが、どうしても日本にとどまってくれという老いたる母の願いをきき容れ日本で開業いたしましたが、私が五歳の時、三月十日に父が亡くなりました。

私は父の死んだ早春の月の光をよく覚えています。父の顔にかかっている布を外しますと、月光が父の頬を照らし、いつもの父とは違った冷たい顔でした。私はこの思い出を忘れないために、「月の光を大切にしよう」という詩を作りました。

父は医者ですから今際の時は分かっておったのでありましょう、私を寝室に呼び、「私はお前を残して去っていくけれど、何も心配することはない。大きな道をつけておくから安心しなさい」と言いました。そして、魂というものは決して滅びることはないという信仰告白をしてこの世を去りました。

「道はすでに拓かれていた。先に行って道を拓く」。そのいのちの言葉が私の生涯を貫いている父とのつながりでございます。そして、どんなことがあっても人を殺してはならないということが私の心に刻まれていたのです。人を殺したという罪悪感と殺してはならないという使命感が父の信仰でした。それが私自身を養ってくれた父の心の遺産だと思っています。

二、出口のない悩みに苦しんだ少年時代

私が小学校に入った時はすでに戦争の時代でございました。中学四年の時に終戦でしたので殆ど勉強らしい勉強もできず、戦争という激動の嵐の中で育ちました。

この戦争中、少年であった自分の心を苦しめたのは、どんな理由があっても人を殺してはならないという父の信仰でした。勿論、その当時でもどんな理由があっても人を殺したら犯罪ですから裁きを受けて刑に服

さなければなりませんが、戦争というものが媒介いたしますと、アメリカや中国の青年を殺すことは罪悪、犯罪ではなくなるのです。

まとまった考えがあった訳ではありませんが、私は次のようなことを考え苦しみ抜きました。まず戦争の原因、正体とは何なのかということです。人を殺す理由は何か、どうして敵国といわれる国の青年と殺し合わなければならないのか。それから、身近な方々が亡くなっていく報告を聞いておりますと、敵と一対一で切りあって死んだとか、攻撃目標にされて死んでいった訳ではなく、流れ弾とか爆風とか敵が見えない中で偶然に亡くなっていく人が多いのです。

人間の運命とは一体何なのだろうか。尊厳だといわれる私達の命がそんなに軽々しくなくなっていってもいいのか。人間の運命というのは、一体誰が決めるのか。もしそうであってはならないとしたらどんな生き方をしたらいいのか。

こんなことは学校の先生に相談する訳にもいきませんし、残念ではございますが、教会の牧師さんにも友達にも打ち明けることが出来ませんでした。母にも心配をかけますのでそのことは言いませんでした。一人、出口のない悩みの中で苦しんだものでございます。

私は栃木県の宇都宮で育ちました。空襲で当時の街の様子はすっかり変わってしまいましたが、上町と下町という二つの町がありました。この上町から下町に通じる坂道を下から上がってくる自動車やトラックめがけてぶつかっていくのが当時の私の毎日の仕事でした。どうしてそんな愚かなことをしたのか想像出来ないでしょうが、そうしないと辛くてどうにもならないのです。問題の答えが見つからないのです。

今だったら死んでいたかも知れませんが、当時の運転手さんは親切で上手に避けてくれましたし、馬鹿なことをするなと運転手さんに殴られたこともありました。

一回だけ跳ねられました。もう薄暗い時間でしたが下町の方から荷馬車がやってきました。馬は避けてはくれませんでした。跳ね飛ばされ火花が散ったことを覚えています。そして、空中に放り投げられた時は意識も何もないのです。気が付いた時は道端に掘られていた防空壕の中に自転車もろとも叩きつけられていました。自転車はぼろぼろです。寒い時でありまして、その寒さと痛さで眼が覚めました。私は戦争中に育った子供ですから、死ぬというのは当然のことだという教育を受けました。ですから死ぬのが恐いとは頭の中では思っていなかったのです。

「なぜ人間は戦争しなければならないのか。人間の運命というもの、尊厳なる命というものがどうしてそんなに簡単に失われていくのか。神とは本当に存在するのか」。その答えが明らかにならなければ死んでも死に切れないと、防空壕の中で星空を見上げながら泣いたのを覚えています。ぼろぼろになった自転車を引きずりながら家に帰りました。

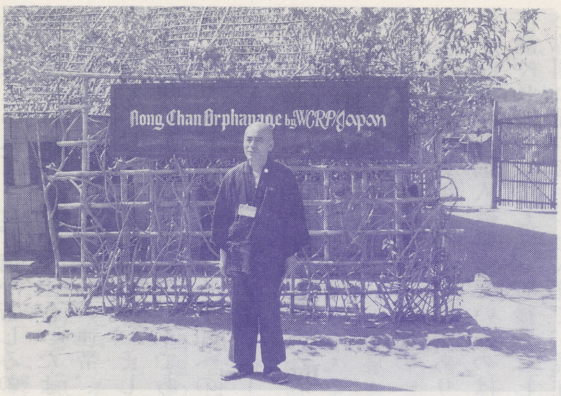
学校を出たばかりの若い物理の先生にたった一日だけ教えて頂いたことがありますが、先生は物理を教える代わりにこの戦争は戦争する原因がないのだと教えてくれました。その理由はもう私は覚えておりませんけれども、強烈な印象でした。その先生はそれからもう学校には来られませんでしたが、こんな江戸時代の俳句も教えてくれました。「浜までは海女も蓑着る時雨かな」。海女というのは海に潜ってあわびを採ったり海草を採ったりする濡れるお仕事です。それでも海に入るまでは時雨ていたら蓑を着るというのです。あなたがたも私もいずれこの戦争で死んでいく身かも知れないが、青春を大切にして歩いていきなさいということを、この俳句に例えて教えて下さったのでした。

その先生には再びお目にかかることはありませんでしたし、噂も聞きませんでした。恐らく教壇に立てない何らかの事情があったのだと思います。

三、神学の道に入ることを決心する

そして終戦を迎えまして、学校に復帰いたしました。学校からの帰り路、ラジオ放送が聞こえてきました。あの頃はNHKしかございませんでしたが、「真相はこうだ」という特集番組でした。日本の財閥や軍閥が満州を侵略し、アジアを日本人が土足で踏みにじるような残虐な行為がなされたと、戦争責任者を一人一人告発する番組でございました。私はそれを聞きながら、「私の求めていた平和というものはこんなものではなかった。そんなことに真実があるんじゃない。どうして人間が人間を殺さなければいけないのか、争わなければならないのかということなんだ」と思いました。その虚脱感といいますか、全く虚しい日々が続きました。勉強をする気にはなれないし、本当にどうしていいか分かりませんでした。友達は上の学校に入るために猛

烈に勉強していましたが、私はとても勉強する気になれないのです。勉強して何をしようというのか。友達から、「お前そんなことを言ったって自分の将来を考えなければ駄目になる」と忠告を受けましたが、何か脱け殻のような気持になりまして将来に対する指針が生まれてきません。私は小さい時から父の影響で、心の片隅で牧師になりたいという気持を持っていましたので、神に仕える僕になれば仕事をしているうちにお導きがあるのではないかと、まあそんなことを考えまして大学の予科に入って神学の道に入ろうと決心しました。



●インドシナ難民救済にも熱心に取り組んでいる（難民キャンプ内の孤児院の前で）

四、師との出会い、母との別れ

私は昭和二十二年三月末に京都にきて、牧師になるために同志社大学を受験いたしました。母親が昔、一燈園にいたことがございまして、そこに泊めて頂いて何かお手伝いをしながら同志社に通って勉強するのが牧師になる道として意味のある生き方ではないかと、まあ横着なことを考えまして一燈園をお訪ねしました。そこで、同人の方々が無地の木綿の質素な上衣を着て静かに薪を作っている姿を見て非常なショックを受けました。この人達は自分の欲望を捨てて身を捧げている。私は「どう生きるか」ということでずっと苦しんできたが、「どう死ぬか」ということがもっと大事なのではないのか、この人達は今死んでも悔いがないのだ、とても学校なんか受けられないと思いました。

その時天香様は七十七歳だったと思いますが、自分の孫が帰ってきたような懐かしさを覚えて下さったのでしょうかお会い下さいました。そしてその時十七歳だった私に「優れた人間にならなくていい。立派な人間にならなくていい。大事なことは自分を捧げること。お役に立つ生き方をすること、これが一番大事な生き方だ」と優しく教えてくださいました。ああ、これなら自分にも出来ると思い、「私を弟子にして下さい」とお願いしました。お母さんの許しを頂いてきなさいということで郷里へ帰り母親にそのことを話しました。母は一言も反対しませんでした。これから私が妹達の面倒を見なければならない年齢でしたから、その気持で家で頑張ってくれと母から言われたとしても無理もなかったはずなのですが、「それはいい道を見つけた。あなたが歩むには一番いい道ではないか」とむしろ励ましてくれました。

霜柱の立っている寒い朝、母親は障子をぴしっと閉めて「外までは見送らないから」と言いました。父を祀ってある部屋の中で母が何をしていたか知りませんでしたが、恐らく仏壇の前に座って祈っていたのでしょう。その母の思いを背中一杯に感じながら京都へ向かいました。

私は優れた人間でもなければ立派な人間でもありません。ただ西田天香という素晴らしい師に出会ったというだけのことでございます。それから四十三年たちますが、歳月がたっても未だに何も分かっていない。しかし、分かっていなくてもやめることは出来ない。祈りとか願いというものは、私の個人的な目的ではございません。キリストは山上の垂訓の中でかく祈れと教えて下さいました。祈りは神の祈りです。願いとは仏に身を任すこと、私を捨てること、自分をなくしてついていくことです。聖書の言葉でいえば、「あなたが十字架を背負ってついてきなさい」ということではないかという感じがします。

五、戦争の原因は自分の中にあった

一燈園に入ったからといっても何も解決した訳ではない。長い長いトンネルでございます。「なぜ人は殺し合わねばならないのか」、「戦争の原因とは何か」が分からないのです。本当に長いトンネルでした。針の先程の明かりでもトンネルの闇の中に点らないかとそんなことを何年も思っていました。

或る日、はっと気がついたのです。戦争の正体、原因は、ああ私だったのだなと。他人と争わずには生きていくことの出来ない私、この私に戦争の原因があった。私が長いこと求めてきた戦争の原因は私の中にあった。有史以来沢山の人々がこの問題で苦しんできたのですね。私は自分だけが苦しんできたと思っていたのですが、沢山の人々の苦しみの中で

私が支えられてきた。何か苦しみの海の中にぽかっと浮かび上がったような気がしたのです。苦悩の連帯、私の苦しみは全人類の苦しみ、そして全人類の苦しみは私の苦しみである。それが私の歩んでいく平和への原点という感じがいたします。

六、韓国人被爆者問題に取り組む

私が現在取り組んでいる問題の一つに、在韓韓国人被爆者の問題があります。在韓韓国人被爆者というのは広島や長崎で被爆して、戦後独立した韓国に帰っていった人達で、現在二万数千人おります。韓国には被爆者のための病院もないし専門の医者もいないので放置されています。そして彼らは働けないので生活困窮者でもあります。もう老人でいずれ死んでゆく人達であり、もともと責任は日本にあるということで殆ど対応らしい対応がなされておりません。日本と韓国の間で日韓講和条約が結ばれて、戦後の問題処理が終わり、被爆者に対する責任も賠償金の中で果たしたということになりました。けれどもその余りの悲惨さに、日本政府は五年間「渡日治療」、つまり日本に渡って広島の専門病院で治療を受けさせるという条約を締結いたしましたが、一昨年の十二月三十日にこの条約は失効しました。

戦争は終わってもその人達の中では戦争の痛みは消えていないのです。痛みの溝に入って抜けられないのです。私は弱者に歴史の皺寄せが皆くるのだと思います。ですから弱者の立場に立たないと、歴史の正体は分からない。弱者の問題を全体の問題として受け止めないと、本当の平和の姿勢が生まれてこないと思う。解決のつかない問題ですけれども、私はそうしなかったら戦争中苦しんできた意味がないのです。大きなことは分かりませんが、それが私の使命です。

七、日本人が忘れてはならないこと

私が在韓韓国人被爆者に最初にお目にかかったのは随分前のことです。噂には聞いていましたが、韓国に行ってよく聞いてみたら本当にその通りでした。私はその時、「被爆に関しては日本人は被爆民族、被害者である。けれども戦争の原因を持たない朝鮮半島の人達に対して私達は加害者だ。このアジアの戦争では、この加害者的存在として日本人の戦争責任を忘れてはならない」と思いました。

日本人は被爆したのだから被害者であると私達は鵜呑みにしていますが、韓国の二万数千人という人達に対して私達は加害者です。彼らにはそうなる何の理由もなかったのです。南方の最前線に慰安婦として連れていかれたのは、殆ど朝鮮の娘さん達で、決してキーセンではありません。逃げようとする彼女達を拳銃で脅してトラックに載せて日本兵の慰安婦として南方に送りました。

戦争が終わって現地に多くの人達がとり残されました。満州に強制的に開拓民として連れていかれた朝鮮の人達は黒竜江省を中心として二百万人がとり残されました。現在、中国と韓国の間には国交がないから日本人が間に入ってお手伝いしなければなりません。中国残留日本人孤児のニュースに私達が劇的に感動するならば、二百万人の残留朝鮮人の問題を忘れてはいけない。

八、憎しみの心から平和は生まれない

私はこのお仕事の中で、韓国被爆者協会の前会長の姜さんと知り合いました。この方は中学の時、近所の子供に朝鮮語を教えて警察に捕まり、どうして自国の言葉を教えて悪いのか、朝鮮は独立しなければならないという情熱に燃えて地下運動に身を投じた人です。

そして下関で検挙されました。拷問で一番苦しかったのは馬の皮のチョッキを着せられて水をかけるとそれが段々縮まっていくというもので、それで沢山の仲間が死んだそうです。原爆が投下された時、一番暗かった独房であったために被爆はしたものの一命はとり止めました。日本で学び日本で習ったものは全部頭から忘れ去ろうと、一生懸命努力したといいます。しかし唾棄すべき日本、忘れられない恨みのある日本であるにも拘らず、被爆者協会会長として再び来日され、「私達韓国人のために活動して下さっている愛のある日本人」に出会った。

私はその時にそれまでの自分の考え方を変えざるを得なかった。平和とは憎しみの心からは決して生まれない。憎しみを乗り越えた愛のある生き方によって戦争の溝を埋めることが出来る。私は姜さんの告白に本当に泣きました。又、韓国人の被爆者から「踏んだ者は踏まれた者の痛みを知らない」ということを学びました。

私は知らなかったし殆どの人もそうでしょう。けれども「知らざる罪」というものがあるということを忘れ

てはならないと思います。知ろうとしなかったという姿勢。高い立場にいる人は踏まれた者の痛みが分からない。知るためには踏まれた人と同じ立場に立つ姿勢が必要であり、それが私は愛だと思います。私が今申し上げたことはなかなか前に進まない問題であります。けれども進む進まないに拘らず、しなければならない仕事だと思っています。

九、一介の僕として生きる

聖書に『イエスは召し使い達に言われた。「水がめに水を満たしなさい」。彼らは水がめを縁までいっぱいにした。それをイエスがぶどう酒にした』という一節があります。

私達は黙って召し使いの仕事をするだけです。ぶどう酒にするかどうかは私達の力ではない。解決などというものは私達に与えられたものではない。しかしながら、とるに足らない一介の僕として死ぬまでその生き方を続けることが私の平和への道であると心得ております。従いまして、何かを解決したというご報告は出来ませんが、いつも大きな問題の中に苦しんでいる世界の中で、もしも自分を捧げることが出来たら、それが私の大切な生きがいであると思っております。

（終）

◆一燈園とは……（争いなき村・光泉林）

一燈園は明治三十八年西田天香さんの創始によるもので、自然にかなった生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に変えなくても許されて生きられるという信条のもとに、常に**懺悔の心**を以て**無所有奉仕の生活**を徹底して行じている処です。

一燈園では**おひかり**（神・仏・大自然）から預かった財物を世の争いの種にならないよう運用し経営する経済機能を**光宣社**と呼んでいます。**光宣林**はその光宣社の一つであり、又、本部的機能をもっています。

昭和三年の春、開林に着手し、翌四年八月十二日に財団法人として許可されました。それ以来年々土地も拡張され、建物も殖えて、今では土地約七万坪、建物が九十棟程あり、常住している者は百世帯約三百人を数えます。

これらの人々は天香さんの遺された精神と生活を中心に一大家族となっておひかりの道にいそしみ、一人も手を空しくしている者はなく、又一人も報酬の為に働く者はありません。願行に深浅の差こそあれ、すべてが懺悔報恩の心を以て捧げた働きをして、しかも能力に応じて働き、必要に応じて恵まれる自然法爾の生活の成就を念願しています。

要するに一燈園は**無所有生活の体験所**であり、光宣林は**物の預かり方を試みる所**です。

六万行願　六万行願とは、お便所の掃除を通してへりくだる心を養い、争いのない世界の将来を祈る大願をもってお便所のお掃除をさせて頂くことで、大正八年第一次世界大戦の後、天香さんによって発願されました。

礼拝・下坐・奉仕・慰撫・懺悔・行乞の六つの祈りがそなわり、一万戸を単位として六万行願と称しています。全日本六万行願千大結成発願から納骨堂の丘の上に**六万行願旗**を毎日掲揚しています。

住所
〒六〇七　京都市山科区四の宮柳山町　（東海道線—山科駅　京津電車—四宮駅）
一燈園　TEL〇七五（五八一）三三六㈹　FAX〇七五（五八一）三三九

西田天香（にしだてんこう）
明治五年滋賀県長浜の商家に生まれる。二十才の時、北海道開拓事業にリーダーとして参加するなど、経済人としての将来を嘱望されるが、明治三十八年に、他と一切争わずして生きることを決意し、無所有、下坐、奉仕に撤する一燈園生活を始める。
大正八年に世界の真平和を願って、六万行願（形はお便所の掃除）を発願し全国的に行じる。大正十年に出版した『懺悔の生活』は、空前のベストセラーとなり、全国的に一燈園生活ブームが起こる。
大正十五年～昭和二年に約一年間アメリカ巡錫。昭和四年に財団法人懺悔奉仕光泉林を開設（幼稚園から大学林まであり、宗教法人ではないが、礼拝堂で朝、夕に礼拝が行われるユニークな生活共同体の村として世界的に有名）。
昭和二十二年に参議院全国区議員に当選。
昭和四十三年九十六才で帰光。

●幼い弟の子守をする5才位の村の少女

青年海外協力隊員として

アフリカ・ザンビアで過ごした2年間（その8）

寒河江（さがえ）　亮（りょう）

一、ある日突然商品が店から消えた（ザンビア物価事情）

このところの物価の凄（すさ）まじいばかりの上昇には心底驚かされる。ガソリン、主食のミルミル（トウモロコシの粉）、サラダオイル、小麦粉等の生活必需品は勿論のこと、ありとあらゆる品物の値段が、通常は小刻みに、時には大幅に、どちらにしても確実に上がっていく。

日本への郵便料金も度々大幅に値上げされ、ザンビア通貨クワチャの交換レートも急速に下落している。

その上、ザンビアでは料金値上げのニュースが実施当日の新聞に突然発表されることが多いので、買い溜め等の自衛策など取りようもなく、まさにお手上げの状況である。だが、高くなっても品物が店頭にあって買えるうちはまだよい。ルサカでは、商品が突然市内のあらゆる店から姿を消すことも決して珍しいことではない。

タバコ●ビールが、洗剤が、ガソリンが、そしてパンが消える。一ヵ月そして二ヵ月と、人々はじっと耐える。そして次に現われる時には必ずと言っていいほど値上げされている。

ドル・オークション制度の導入

さて、私の任期中、ザンビアの経済や社会、そして物価事情に大きな影響を与える為替管理制度の改革が実施された。ドル・オークション制度の導入である。その背景を簡単に説明したい。

ザンビア通貨クワチャはもともと他の発展途上国の通貨同様、交換不能通貨であり国際的には通用しなかったし、ザンビア国立銀行が独自に定めていた一ドル＝二・五クワチャという交換レートも実際の価値からは大きくかけ離れたものだった。外貨収入の大部分を銅の輸出に依存するザンビアは、国際市場における銅価格の低迷による外貨収入の減少、及び多額の対外債務負担などによって外貨準備高の急激な悪化に見舞われた。輸入品の外貨決済もままならず、石油製品、工業製品、医薬品などの深刻かつ恒常的な不足が続いた。このことが冒頭のような状況の原因となっていた。IMF（国際通貨基金）や債権国グループ●の経済改革への圧力も強まり、ついにザンビア政府はドル・オークション制度導入に踏みきらざるを得なかった。

このドルの競売制度（せり）で、ザンビア人も銀行に一定額以上の預金があればドルを買えることになった。外貨規制の緩和による市場の活性化を目指した、この世界でもあまり例を見ないというドル・オークション制度導入によりザンビアの物価事情がどう変わっていったのか、見たままを綴（つづ）ってみたい。

病気には〝苦い薬〟を……

まず第一回目のオークションで一ドルが実に五クワチャ以上の値をつけ、実質的に一〇〇％以上の切り下げとなった。手持ちのお金も銀行預金も一瞬にして半分以下の価値しかなくなってしまった。

これは私達協力隊員にも痛かったが、一般のザンビア人にはもっと大きな打撃を与えた。輸入品や関連商品の値段が直ちに二倍、またはそれ以上に引き上げられた。さらに、輸入とは直接関係ない農産物や食用淡水魚などの国内産品の便乗値上げや、バス、タクシー、飛行機等の公共料金の大幅な値上げが相次いでなされ、怒った消費者によるボイコット運動や暴力沙汰がひき起こされるに至っ

た。

学生や主婦達による政府への抗議デモも行われ、鎮圧のため軍隊が投入されたが彼等の怒りはさらに燃え上がり、ルサカ中心部の市場において、一種の暴動状態が発生するまで事態は悪化した。軍隊の発砲でケガ人が出たとも死者が出たとも噂された。タクシーの運転手もガソリン値上げと客離れによるダブルパンチを浴び大変苦しんでいた。

市内には確かに輸入品が豊富に出回るようになり、状況は一見好転したかのように見えたが、残念ながらそれらの価格は庶民の手の届くものではなくなっていた。缶ビール一ケース二十四本、或いはサラダオイル二缶が給料一ヵ月分もするのは異常に思えた。インド人を初めとする商人達は庶民の生活など眼中になく、私達のような外国人相手に商売しているとしか思えなかった。「何という外貨の無駄遣いをしているのか」。スーパーにずらりと並べられた南アフリカ製の罐詰や冷凍食品の食品類を見て、一人の白人が吐き捨てるように言った。確かにザンビア製品とは比べものにならない美しいパッケージには包まれてはいるが、同じような製品はザンビアでも作られているのだ。

一方、●は最低賃金の引き上げ等の対策を講じる反面、国民により一層の耐乏と奮起を求めなければならないという苦しい立場にあった。労働組合を中心とする政府批判の声が高まる中、カウンダ大統領は、病気（経済危機）を克服するには苦い薬（オークションによる物価上昇）も飲まなければならないと国民に訴えた。その苦い薬を、指導者達も含めて本当に飲む覚悟がザンビア人にあるのか、いずれ歴史が教えてくれるだろう。

二、ザンビアの特産品

日本の二倍の国土を持ち、八十三以上の部族から成るザンビアには、当然のごとく多数の特産品がある。食い道楽の私としては、ピリッとスパイスの効いた甘辛い味付けの炭火焼きスペアリブや塩だけで食べる歯応え十分の地鶏のバーベキュー、そしていつも朝食代わりに楽しんでいた甘くてジューシーなパイナップル等を真っ先にお薦めしたい。万が一、ザンビアに行かれる機会があれば是非トライして頂きたい。

さて、従来アフリカからのお土産といえば、象牙やサイの角、ライオンやヒョウの毛皮などの野性動物製品にとどめをさしたものだが、近年、日本政府が野性動物の国●的保護を目的とするワシントン条約を批准したため、ザンビア天然資源省自然公園野性動物局発行の輸出ライセンスなしでは日本へ持ち込めなくなった。ザンビア政府も規制を強め、外貨で購入しなければ輸出ライセンスを発行してくれなくなった。つまり、現地通貨で買ったものは日本へは絶対持ち込めないということだ。動物局で売っている象牙製品自体も、ポーチャーと呼ばれる密猟者達からレンジャー部隊が押収したもののみらしく、品質や加工技術の点でもの足らない。ブラックマーケットにはまだ品質のいいものが沢山出回っているが、法外な代金を要求されるし、ライセンスなしでは仕方がない。私も、知り合いのザンビア人から今や絶滅寸前と言われる黒サイの角を買わないかと持ちかけられ断った経験がある。黒サイの角は漢方薬の原料として東南アジアあたりでは大変に珍重され、何と一本が何百万円もすると言われたが、やはり人間の欲で貴重な野性動物を絶滅に追いやってはならないと思う。

それからダイヤモンドやエメラルドといった宝石類をよくザイール人達が売りに来ていた。たいがいは色付きガラス玉らしいが（値段も一カ

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌―MAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度（口50、000円（寄付扱い・年額）を新たに設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

ラット五千円くらい)、時には本物が混じっていることもあるそうだ。ある時、売り子をからかってやろうと、本物でないことを証明して見せるからと、コンクリートの床の上でトンカチを使って、それを見事に叩き割ったことがある。ほら、やっぱり偽物だと言ったら本人もガックリきたが納得して帰っていった。そのことをその筋の専門家に話したら、どうもそれは本物らしいゾということになって、大笑いしたことがある。売り子さん、ゴメンなさい。

ザンビアは世界有数の銅産出国だから、コップや花瓶などの銅製品も有名だ。バングルと呼ばれる各種の腕輪やアクセサリー類(ザンビア政府の刻印入りの銀の腕輪や象牙の腕輪、ウソかマコトか知らないが、幸運を呼ぶという象の尻尾の毛で作ったブレスレットなど)や、濃緑色のマラカイトという鉱物で作った置物。木彫りの人形や仮面、ブリキの鍵盤を持つザンビア風ピアノ、都市部ではあまり見かけないが、地方では女性の普段着として使われているチテンゲというカラフルな生地などもザンビアの特産品と言っていいだろう。みんな安物ばかりと思われるかも知れないが、この素朴さがいいのだ。

(次号に続く)

事務局近況

●去る十二月九日(土)に開催したチャリティーバザーのご報告を致します。今回の売上金は二十九万三千二百八十一円で、純益金の十九万五千六百九十二円は、今月十日より二十日までMRAタイ難民キャンプ訪問団の一員としてタイ・カンボジア国境の難民キャンプ・サイト2を訪れた杉事務局員(他に日本から古川宣宏、砂野吉正両氏も参加)に託され、現地でキャンプの赤十字に寄贈させて頂きました。ご協力下さいました皆様にお礼共々ご報告申し上げます。次回のバザーは来年四月頃開催の予定です。ご家庭で不要の品(但し、未使用)がございましたら、ご提供下さるようお願い申し上げます。

●今月十六日(土)に憲政記念館で第十一回通常総会が行われ、平成二年度事業計画書・収支予算書、及び理事・監事選任の件が満場一致で可決されました。

引き続いて第二部として行われた文化講演会では、『ダライ・ラマ14世のノーベル平和賞受賞と許しと和解の哲学』と題して、チベット文化研究所所長のペマ・ギャルポ氏にご講演頂きました。

●IMAJ No.60は平成二年二月下旬発行の予定です。

○新しいMRA出版物のお知らせ○

MRA体験集

『出逢い…』 MRAと私 No.2

頒価 300円

『出逢い…』
MRAと私
No.2
財団法人国際MRA日本協会

好評発売中!

お申し込みは 〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
TEL:03(821)3737 FAX:03(821)6479
郵便振替(東京8-38289)

●『出逢い……』MRAと私—第二集発刊に寄せて●

尾崎行雄記念財団副会長 相馬雪香

此の度、『出逢い……』MRAと私—第二集を皆様にお届け出来ますことを心から喜びとしております。

MRAとは、誰でもいつでも始められる『生き方』の提唱なのです。エム・アール・エーと聞くと、いかにもバタ臭く感じられる向きもあったり、「道徳再武装」という邦訳が、平和を念じている者に違和感を与える感が無きにしも非ずですが、この小冊子に収録されました文章をお読み下されば、MRAというものは決して難しい理論ではなく、人間の誰にでも共通なごく自然の感情(羨望、憎しみ、傲り、自己憐憫等々)に負けるのではなく、打ち克つ道、生き方というものを私達に示しているのだということが良くお分り頂けることと思います。

MRAは古くから洋の東西を問わず認められてきた真理に新しい衣を着せ、極めて分かり易く、やる気さえあれば誰にでも実行出来る単純な処方を提供しております。今日は、今まで考えられなかった程多くの、そして新しい難題が世界に充満しておりますが、どんなに素晴らしい制度を編み出し技術を開発しても、それを運用する人の心が曲がっていたのでは解決にならないことははっきりしております。

家庭、社会、国家、そして世界を構成する最も大切な素材は「人」であり、相手のあやまちを指摘するのをやめて自分のあやまちを認める時、人は変わりそして世界が変わり始める。つまり私達「一人ひとりのあり方が国のあり方」なのだとMRAは言っております。

どうぞご家族や友人の方々にもご一読をお薦め下さい。